



あなたのそばに人権相談員がいます!!

発行人 牧坂秀敏・小宮 豊

人権プラザ便り [結い]

(財)東京都人権啓発センター 〒111-0023 台東区橋場1-1-6 TEL.03-5808-9682 (直通)

**「結い」とは、人と人が支え助け合う絆を紡いでいくこと。
人権相談活動は、ホッとできる「結い」ネットワークづくり!**

◇これまでの取り組みをふいかえて◇

●無念ですが、Bさんが逝ってしまいました!

未曾有の東日本大震災が起きて、1カ月が過ぎました。今も連日、被災地のすさまじい光景や筆舌に尽くしがたい被災者の深い悲しみ・怒りそして不安のなかで、必死に生き抜こうとする姿などが報じられています。あらためて、無念にも亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災地の皆さんにお見舞い申し上げます。

この便りで、残念ながら悲しい報告をしなくてはなりません。病との闘いに力尽きて、ついにBさんが帰らぬ人となってしまいました。『人権プラザ便り[結い]』8号が出来上がった直後、3月16日の夕方、携帯電話が鳴りました。妻のC子さんからです。Bさんの様子を知らせてくれるいつもの電話だと思ったら、「本日、午前11時10分に亡くなりました」。ご協力をいただいている福田さんとお見舞いに行き、Bさんと言葉を交わしたのは、大震災直前の3月9日が最後となりました。

転院先の病院訪問のあとC子さんとお話をしたときに、万一亡くなられた時のことにも話は及びました。生前、夫婦の会話のなかで、Bさんは「葬式は無宗教でいいな」と言われたそうです。だから、Cさんは「無宗教で家族葬という感じでやれたらいいと考えています」と。そうしたいきさつもあって、訃報を聞いたときに、「葬儀はどうされますか?」と尋ねました。ご家族だけでお見送りをされるのであれば、葬儀への参列は遠慮して、身辺が落ち着いたころにご自宅に伺おうと思っていたからです。こちらの気持ちを察しられて、Cさんは「どうぞ、来てください」と言われます。

翌日、福田さんとお通夜にうかがい、なんとも安らかな表情で眠っておられるBさんと対面。必死に生きよう

としていたBさんの苦しい表情を思い起こしながら、「ほんとお疲れさまでした」と心のなかでつぶやく。ご冥福を祈ることしかできません。亡くなる数日前から、以前ほど苦しまなくなったといえます。

近隣のまちが計画停電の最中、ご本人の遺志を尊重して、無宗教で、花に囲まれた、とても心温まる葬儀を営まれました。参列された支部の方々に気丈に振る舞っておられたC子さんが私たちに、「大変なときに、そばにいてもらえて心強かったです」と声をかけてくれましたが、やはり、無念としかいいようがありません。

Cさんのこれからの生活を考えると、Bさんと50年以上も連れ添って来られたのですから、喪失感におそわれるのではないかと危惧されます。できる限り見守ってあげたいと思います。

●「結い」が伝えるもの、その波紋は……

『人権プラザ便り[結い]』は毎号、東京都連のホームページ上の「人権相談」に掲載されるとともに、都連各支部に配布していますが、少しずつ手ごたえを感じています。最近のことですが、「支部と区が共催で行っている月1回の社会教育講座で、人権問題にかかわる話をしてくれないか」と思いがけない講演依頼がありました。女性部が中心に活動しているようですが、新しい展開の第一歩として、大いに楽しみにしています。

人権問題一般ではなくて、人権相談員としての活動とおしてきてきたもの、あるいは、人権にかかわる様々な課題というところで、お話しできることは山ほどあります。しかしながら、やはり、ここは支部員の皆さんが抱えている問題や知りたいことなど、それぞれのニーズに応えていくことからスタートできればと思います。

また、ある支部では、この便り「結い」が好評でよく読まれているといえます。そんななかで、退院を迫られ

たBさんのケースと似たような問題が起き、地域包括支援センターを交えて相談がはじまったようです。詳細はまだ把握できていませんが、聞くところによると、退院を迫っている病院が紹介したのは同じ病院系列の有料老人ホームです。入居費が200万円、毎月の利用料が35万円。また、病院に翻弄される人、家族がいます。

しかし、翻弄されないために何をすればいいのか。この間の私たちの取り組みがその道標になると考えています。そこでは、家族にもある意味、覚悟が求められます。高齢の親あるいは連れ合いをどういう病院・介護施設に入れるのか、あるいは介護サービスを利用しながら在宅で介護していくのか、本人の意思をいかに尊重するのか。これらは、いずれもお金の問題もからんで、具体的に検討していくことが必要となります。

●信頼できる医療とは、必要なケアとは

実は、医者あるいは病院が系列の介護施設に入所させようとするのはよくあるパターンです。私が認知症専用のデイサービス事業所を運営していたときに経験したことを紹介します。高齢の女性ですが、認知症の疑いがあると家族が心配して病院に連れて行きました。診察した医者は、家族に対して、「重度の認知症だから、自宅での一人暮らしは無理。うちのケアハウスに入りませんか」とすすめたのです。これを鵜呑みにしてはいけません。

本来は、認知症を予防するためにどのようなサポートが必要か、どのようなことに注意しながら生活をしたほうがいいのかなどの適切なアドバイスを行う。また、たとえ認知症になっても安心して地域のなかで暮らせるようにするにはどうしたらいいのか、本人および家族に寄り添って一緒に考えていくことが求められるわけですが、そういったアプローチは一切試みません。

ただ、「重度の認知症」とレッテルを貼って施設に囲い込むことしか考えないのは、営利主義と批判されてもやむをえません。さらにいえば、人権蹂躪です。

家族（息子）から相談があり、「デイサービスを利用するというよりは、ふつうの生活をするなかで地域とのかかわりができたらいいのですが」という要望に応じて、地域の人たちに声をかけて「ふれあいと交流の場」をつくりました。彼女はその後どうしたかといえば、住み慣れたまちで家族の見守りや地域のサポートを得ながら、一人暮らしの生活を続けておられました。挨拶を交わすところりと笑顔を返してくれる彼女にとって、馴染みの人たちとのかかわりは何物にも代え難いのです。

明らかに認知症の症状は改善したわけですが、家族が本人の意思（住み慣れた自宅で暮らしたい）と生活を尊重して、施設などに入所させることなく、毎週顔を出したりして継続的なかわりを持ったことが、彼女が安定した生活を取り戻せた大きな要因だと思われます。

●万一のとき、困らないようにするには

さて、いままで相談にかかわるなかで、あるいは家族の対応をみていて、とても気になることがあります。ひごろの生活のなかで、元気な人たちが中心であれば、健康についての不安は漠然とあったにしても、介護問題などが身近にかかわるものだとは思われません。それは高齢者であっても然りです。したがって、関心も薄く、医療や介護の現状、介護保険制度や利用する際の手続などを知らなくても生活は不自由しません。

ところが、ある日突然やってきます。たとえば、転院や退院を迫られた途端に、家族は混乱を来したり、動揺したりします。どこに相談したらいいのか、途方に暮れます。いままで必要ではなかった情報が必要となります。しかし、それはどこから取ればいいのか、探す術さえなければ、右往左往するしかありません。多くの場合、医療にかかわることであれば、「病院にまかせておけばいい」、「病院がなんとかしてくれる」と思いがちです。ところが、実際はまったくちがうことがこの間の事例で明らかになりました。

何か問題が起きたら、「誰かに頼る」のではなく、「口利き」をするのでもなく、ともに悩み考え知恵を出し合って解決にあたる、まさに「ともに支え生きる」活動が一人ひとりの不安を取り除き、自ら学び、知恵や知識を獲得し、安心して暮らすことにつながっていきます。そして、「一人ではない。なかがいる」と実感できることが、生きる意欲を引き出します。

●まず正確に必要な情報を手に入れて

いま身の回りで起きていることは、直接わが身に降りかかって来なくても、決して自分と無縁ではないことを肝に銘じてください。正確に必要な情報を手に入れて、落ち着いて行動すること。無知であることが無用の混乱を引き起こします。原発事故も然りです。

これまでの取り組みでいえることは、問題が起きたときに、一方的な情報に依拠せずに、必要な情報を自分たちで手に入れて、選択肢を広げ、何を大切にすべきかを判断できる力を培っていくことです。それが、万一の時、問題解決にあたり柔軟で的確な対応ができる術です。